

田じまいの煙に燻る山家かな
曼珠沙華抱くほど摘みし記憶かな
歳時記を座右に灯火親しめり
カルストの起伏輝ふすきかな
天高き方に居ませる主を賛めよ
馬上より見ゆカルストの大花野
骨董市手持ち無沙汰や秋日和
爽やかや研師の声のよく響き
朝日いま隈なく照らす刈田かな
賜猛りパターの手元狂ひけり

帆を揚げしマストに絡む秋の風
秋天下間歇泉の噴くを待つ
背の鈴を鳴らす神馬や秋祭
澄む池に出てはひっこむ亀の首
露草や終着駅の車止め
秋草を引けばびしびし実の爆ぜし
大川のいま上げ潮や鰯跳ぬる
落し水聞ききて農夫の至福時
流れゆく雲の間より今日の月
波音の夜寒となりし浜辺かな
海風ぎて一枚鏡鰯雲

メルヘンの絵本画展や灯親し
色変へぬ荒磯の松や波白し
秋草を贅に活けたる句会場
吾が肩に触れもす風の萩親し
猫じやらし一輪挿しに二三本
山裾にとどく日のあり曼珠沙華
鯛雲丘の上より弥撒の鐘
揺れやまぬ萩の影おく茶筌塚

二〇二二年一〇月三日

殉教の墓訪ふ畦の彼岸花
近道のはずが誤算や暮早し

宏さぽあよ美よ雅な有
つんさししつ
虎きここ女咲女流き香

うよさ宏雅きよ満な三よ
つしつ　　づう　　つ　　う
ぎ女き虎流な子天き刀子

きと き菜よあな満せは
づも づ しさつ いく
なえ な々女こき天じ子

氣に入りのぐい呑み出して温め酒
 朝月を起点としたる鯛雲
 武将みな同じ彩なる菊衣
 松原を抜けて展けし秋の灘
 一湾を縁取る街の秋燈
 藍の空残して釣瓶落としの日
 寝おしみてをれば雲間の十七夜
 稜線にスポットあてて秋日落つ

満よはうよ宏菜つ
しくつし　く
天子子ぎ女虎々し

持ち運ぶ案山子の足は竹ぼうき
打ち仰ぐ大樹に畳む秋日傘
立待の波音しるき渚かな
曼珠沙華砦としたる山家かな
とんぼうの影すきとほる石の上

二〇二二年一〇月一日

なつ 百 よ よ とろ
き 合 女 し し うち

朝まだきより鳥語燦台風過
厨妻こころはすでに月の人
十六夜の雲間ただよひては現るる
其処ここに彼岸花燃ゆ千枚田
切株をテールとして茸料理
絡む日を払ふパンパスグラスの穂
秋天下山頭火像傘を脱ぐ
唐辛子照り夕映えの平家村
夫と吾の飲み物違ふ夜長かな

二〇二二年九月三〇日

と菜はあ百せようつ
もくさくしいつく
え々子こ合じ女ぎし

鼓笛の音天に響す運動会
犬小屋の主背を丸め雨月なる
コスモスの風に抗ふ術知らず
田仕舞の煙りにむせぶ案山子翁
刈りし田を傍若無人鴉どち
大岩の裳裾の見えて水澄める
日向より日陰の曼珠沙華が好き
秋風がたたたら走りす川面かな

英 子 とろうち せいじ 雅 流 せいじ しい 女 子 さいき

毎日句会みのる選・二〇一二年一〇月一〇日